

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

「のだ」の〈言い換え〉用法に接続詞が前置する条件の一考察 — 新書テキストを素材として —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-03-24 キーワード: 作成者: 石原, 佳弥子, Ishihara, Kayako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003736">https://doi.org/10.15084/00003736</a>

# 「のだ」の〈言い換え〉用法に接続詞が前置する条件の一考察

## —新書テキストを素材として—

石原 佳弥子

### Examining the Conditions under which the Subjunctive Is Employed in the Paraphrase Usage of Noda: Using New Text Material

Kayako Ishihara

#### 要旨

庵 (2018 : 67) は日本語教育の観点から平叙文の「のだ」の主な用法として〈言い換え〉〈理由〉〈状況に対する解釈〉の3つを挙げている。この中の〈言い換え〉用法は、前の文(脈)の内容を繰り返し、別の表現で言い換えた文に後置する「のだ」の用法を指すものだが、この用法の文頭には「つまり」「すなわ(即)ち」「よう(要)するに」といった言い換えの接続詞が前置する文と、前置しない文とが見られる。そこで本稿では新書作品のコーパスを作成して、接続詞が前置する「のだ」文を抽出し、接続詞が前置する条件を考察した。その結果、同一の主題(topic)の元でひとまとまりとなった複数の文の中で、〈言い換え〉用法の「のだ」文の主題が、言い換えの文の主題と同一であることがわかりにくいテキスト的条件にあると接続詞が前置する傾向にあることがわかった。

#### 1. はじめに

〈言い換え〉用法の「のだ」は、テキストの前方の文(脈)と同じ内容を、異なる表現で繰り返し述べている文に後置するマーカーだが、同じように「言い換え」を意味する「つまり」「すなわ(即)ち」「よう(要)するに」といった接続詞が文頭に前置する文と、前置しない文が見られる。本稿では、新書を調査の対象として、〈言い換え〉用法の「のだ」文の文頭に接続詞が前置する条件について主題(topic)に焦点を当てて考察する。

#### 2. 先行研究

##### 2.1 〈言い換え〉用法の「のだ」

庵 (2018 : 68) は「のだ」の〈言い換え〉用法の例として(1)を挙げ、この「のだ」は「(彼は)16歳から18歳までカナダで過ごした」と「カナダの高校で勉強した」が意味的に等価な関係にあることを示し、前の文(脈)を言い換えているというマーカーであり、テキスト的に動機づけられたものだという。また、〈言い換え〉用法の「のだ」は「わけだ」に置き換えることができるものが多いという。

(1) 彼は16歳から18歳までカナダで過ごした。カナダの高校で勉強したのだ。

庵 (2018)

清水 (2012 : 84) は学術論文を分析し、「のだ」文の助詞「は」に率いられる名詞句が段落内の前文にある場合、その「のだ」文は前文までの内容とつながりを持ちながら前の内容をまとめており、前文にない場合にはその段落の内容だけでなく、さらにその前の段落に出

現した名詞句を「のだ」文の「は」と共に出し、「のだ」文の所属する段落やそれ以前の段落をまとめあげていると述べている。本稿では、清水（2012）が指摘する前者の「は」、つまり、段落内の前文にある「は」に率いられる名詞句を〈言い換え〉用法の「のだ」文の主題（topic）と呼ぶことにする。この「主題」は、「のだ」文の「前提」と呼ばれることもある。

奥田（1990：186）は「のだ」と「のだ」の前方の文との関係を〈説明の文〉と〈説明される文〉の対立とし、〈説明の文〉は〈説明される文〉に後続する「つけたし的」な運びが原則的だという。特に小説では〈説明される文〉が心理的な活動を差し出し、〈説明の文〉がその心理的な活動を方向づけている出来事を差し出すことがあり、その場合、〈説明の文〉に差し出される出来事はそんな風に思い、感じることの〈理由〉となることがあるとして（2）の例を挙げている。

- (2) まだ子どものくせに胸ばかりおおきく発達している。ちぐはぐの感じの、生意気そうな娘だった。マダム蘭子はこういう娘には本能的な反感をもっていた。つまり、女としてのかたちがくずれているのだ！。 奥田（1990）

確かに（2）は「マダム蘭子がこういう娘に反感を持つ」理由が「女としてのかたちがくずれている」と「のだ」文で述べられている解釈が可能だ。しかし、（3）のように、この例文よりさらに前の文までさかのぼって見ると、「のだ」文の主題を「マダム蘭子」とすることは難しいように感じられる。

- (3) やがて三人の一组が来た。すぐそのあとから六人の一组がやって来て、スタンドはほとんど満員になった。六人組の方には若い娘が二人まざっていた。ひとりは少しずんぐりした、顔色の青い娘で、髪をばさばさに大きくひろげている。オーヴァーの下に赤いスーターを着て、グレイのスラックスをはいていた。まだ子どものくせに胸ばかりおおきく発達している。ちぐはぐの感じの、生意気そうな娘だった。マダム蘭子はこういう娘には本能的な反感をもっていた。つまり、女としてのかたちが崩れているのだ。……それが影山径子だった。（洒落た関係）

（3）は、「ひとりは」から「影山径子」についての叙述が始まり、「影山径子」について述べるひとつのまとまったテキストを成している。つまり、「のだ」文の主題は「マダム蘭子」ではなく、「生意気そうな娘＝影山径子」と考えられるので、本稿では、この「のだ」を〈言い換え〉用法と解釈する。このように言い換えの接続詞「つまり」「すなわ（即）ち」「よう（要）するに」が前置した「のだ」文はすべて〈言い換え〉用法とみなして考察を進めることにする<sup>2</sup>。

また、石原（2021：28）は、〈言い換え〉用法の「のだ」は、「のだ」文と言い換えられた文とが同一の主題を持ち、「のだ」文の主題が非顕現となるスタイルが新書の中で一番多く見られることを指摘し、このようなテキスト的条件にあるものが「のだ」の〈言い換え〉用法の典型だと述べている。言い換えられる文が複数文あっても、文脈から「のだ」文の主題

<sup>1</sup> 『洒落た関係』石川達三（1966）文藝春秋

<sup>2</sup> 庵・三枝（2013：55）は、「前の文の内容を別の文で言い換えたときには普通「のだ」を使い、「つまり、すなわち、要するに」とともに使うことがある」と述べている。

が容易に判断できれば、「のだ」文の主題は非顕現になることが多いという。例えば、(4)は「脳は」という主題 (topic) の下にテキストがひとつにまとめあげられており、「のだ」の言い換えの始点は主題「脳は」が顕現する文になる。

ちなみに、(4)の「のだ」は、1つの話題の下にまとまったテキストの最後に現われていて、「のだ」を省略して読んでもテキストの結束性が維持されるので、石原(2021)は、〈言い換え〉用法の下位に位置する〈結論〉用法<sup>3</sup>と考えている。

- (4) 脳は退屈が嫌いだ。「何も新しいことを考えるな」と命じられると、手持ち無沙汰のあまり、思い出を材料に「不安」「焦り」「嫉妬」といったゴミのような感情ばかり作り出す。逆に、考えるネタをふんだんに与えれば、「楽しい、もっとやりたい」という感情を放出する。子どものように単純なのだ。<sup>4</sup> 石原(2021)

## 2.2 〈理由〉用法の「のだ」

「のだ」の〈理由〉用法についても概観しておく。庵(2012:246)は「P。Qのだ。」という文でQがPの理由を説明するとき「のだ」は〈理由〉用法になるという。この用法の例として庵(2018:67)は(5)を挙げている。

- (5) 昨日はいつもより早く家に帰った。結婚記念日だったのだ。 庵(2018)

石原(2021)は「のだ」の〈理由〉用法は「S2だ。S1のだ<sup>5</sup>。」という文を「S1ので、S2だ。」に置き換えられるものだという。つまり、もともと「S1ので、S2だ。」という1つの文が「S2だ。S1のだ。」と2つの文に分かれたものが〈理由〉用法であり、したがって、本来、主節である「S2だ。」に対して「S1のだ。」が従属する度合は高く、ノデ節に相当する「S1のだ。」には南(1974)の階層構造のB類(「が」の文)までしか現われないと石原(2021)は述べている。本稿でも〈理由〉用法の定義を石原(2021)と同じように捉えることとし、元々1つの文であった「S2だ。S1のだ。」という2つの文では、述べられている事態(命題)は1つと考える。

## 3. 調査方法

新書作品10冊のコーパスを作成し、言い換えの接続詞「つまり」「すなわ(即)ち」「よう(要)するに」が前置する「のだ」文を抽出して考察を行う。コーパス化した作品は用例出典に記したものとする。

<sup>3</sup> 石原(2021)は、前方の文(脈)を言い換えるだけでなく、話題の境目の最後に置かれ、結論的な叙述をする「のだ」を〈結論〉用法と呼んでいる。〈結論〉用法の「のだ」は、後続する文との関係性を強く表わす必要がないことから、「のだ」を省略して読んでもテキストの結束性は維持され则认为している。

<sup>4</sup> 『すべての教育は「洗脳」である』堀江貴文(2017)

<sup>5</sup> 石原(2021)では「S1だ。S2のだ。」(「S2ので、S1だ。」)と表記しているが、文の流れからすると「S2だ。S1のだ。」(「S1ので、S2だ。」)と表記するほうがふさわしいため、本稿では後者を用いることにする。

#### 4. 考察

##### 4.1 「のだ」の〈言い換え〉用法と接続詞

新書では、(6) (7) のように「つまり」「すなわ（即）ち」「よう（要）するに」という接続詞が前置するのではなく、「一言でいえば」「何が言いたいか」というとなどが「のだ」文に前置して言い換えを表わす例が見られたが、調査の対象は接続詞「つまり」「すなわ（即）ち」「よう（要）するに」の3つに限ることとする。接続詞の前置する文と接続詞以外が前置する文とは意味的にも、文の構造的にも異なるものとなるからだ。

(6) しかしこの大災害は、リスボン以降続いてきた大災害とは質が違う災害であったように、僕には感じられた。一言でいえば、建築をいくら「強く合理的で大きく」しても、この大災害には対抗できないと感じられたのである。（建築）

(7) だから、少額で投資している人にはやっていたのだが、これを買うこと自体はそれほど「おめでたい」わけではない。

何が言いたいかという、その状況判断をするために「おめでたさ」が有効になるのである。大暴落が買い場になるからだ。（おめでたい）

「のだ」文の文頭に前置した「つまり」「すなわ（即）ち」「よう（要）するに」の数を作品ごとにまとめたものが表1である。

表1 〈言い換え〉用法の「のだ」に前置する接続詞数

作品名	文数	つまり	すなわち	要するに	接続詞 合計	「のだ」 言い換え用法
おめでたい人の思考は現実化する	1,442	6	2	5	13	71
すべての教育は「洗脳」である	2,501	27	0	0	27	159
食べもの探訪記	1,966	1	0	0	1	30
小さな建築	1,829	0	1	0	1	114
テツに学ぶ楽しい鉄道旅行入門	2,202	0	0	1	1	76
二軍監督の仕事	2,142	6	0	0	6	57
農業新時代	2,256	0	0	1	1	52
武士の家計簿	2,683	4	0	0	4	96
料理は女の義務ですか	2,380	2	0	0	2	46
和食の知らされる世界	2,271	11	0	1	12	85
総計	21,672	57	3	8	68	786

表1からは、接続詞の出現数が作品ごとに大きく異なり、「のだ」の〈言い換え〉用法の数と接続詞の数が比例するわけではないことがわかる。つまり、言い換えの接続詞が〈言い換え〉用法の「のだ」に前置するのは、何らかの理由があると考えられる。そこで、どのような条件の下で接続詞が用いられるかを「のだ」文の主題に焦点を当てて考察を進める。

##### 4.2 〈言い換え〉用法に接続詞が現れる条件

表2は、接続詞が前置する〈言い換え〉用法の「のだ」文を、述語に係る主語が「は」の

文、「が」の文、そして、「その他」の文の3つに分類し、その数をまとめたものである。「は」の文には「とは」も含む。

表2 <言い換え>用法の「のだ」文の文ごとの接続詞数

	「は」の文	「が」の文	その他	合計
つまり	23	10	24	57
すなわ(即)ち	0	0	3	3
よう(要)するに	3	0	5	8
合計	26	10	32	68

表2からは「は」の文、「が」の文、「その他」の文のすべてで接続詞の前置が見られ、特に「その他」の文で接続詞の前置が一番多いことがわかった。

そこで、まず、「その他の文」で接続詞が前置した例を挙げる。

- (8) しかし、この手の詐欺師は、それにもめげずに毎日100回でも200回でもかけ続けることができるのである。

犯罪者たちのやっていることだから、電話をかける役にはブラック企業以上の締め付けがあるのだろうが、それにしても一日中かけ続けるのは並大抵のことではない。

どれだけ断られても、怒鳴られても、ひたすら電話をかけ続けられる理由のひとつは、彼らは確率論で考えないからだろう。つまり「ひとり‘カモ’をひっかければ300万円だ」と思えば、打率は関係ない。要するに1日に1件、それどころか、1週間に1件カモに出会うことができれば、相当の売り上げを確保することができるのである。だからこそ、どんなに失敗を重ねても、チャレンジの回数を増やすことが目的にかなっている。(おめでたい)

- (9) ネットネイティブ世代は、「画像がすぐ消える世界」の価値を直感的に見抜く。数秒で消えるなら、どんな変顔写真だろうがお互い瞬間的にネタにして終わりにできるし、データが残って「黒歴史」になることも避けられる。毎日「いいね!」を稼がなければ、フォロワーを増やさなければというストレスもない。つまり、どこまでも気楽なのだ。彼らにとって、余計な情報やモノは、むしろウザいゴミにすらなる。(教育)

(8)の「のだ」文には「要するに」と言い換えの接続詞が前置している。(8)の「のだ」文の主題(topic)は「彼らは」と考えられるが、「彼ら」はさらに前の文脈にある「この手の詐欺師」を言い換えたものである。また、「のだ」文には主題が顕現していないので、言い換えの文と同一主題であることがわかりにくくなっている。

一方、(9)は「のだ」文の主題(topic)が「ネットネイティブ世代は」とわかりやすく、前掲の(4)とテキスト的条件が似ているように感じられる。しかし、(9)は「のだ」文とその直前の文を「どこまでも気楽なので、毎日「いいね!」を稼がなければ、フォロワーを増やさなければというストレスもない。」と「S1なので、S2だ。」に置き換えられ、1つの事態を述べる文が成立する。つまり、接続詞の前置がなければ<理由>用法の解釈のほうが妥当となる。

本稿では、〈理由〉用法を野田 (1997) の「スコープの「の (だ)」」<sup>6</sup>に相当するものと捉え、〈言い換え〉用法を野田 (1997) の「モダリティの「のだ」」<sup>7</sup>に相当するものと捉えている。一般に、「のだ」の用法は語用論的な問題と考えられているように、「スコープの「の (だ)」」と「モダリティの「のだ」」は連続性を持つものだが、テキストを正確に理解するためには、〈理由〉用法と〈言い換え〉用法の「のだ」を正しく解釈する必要がある。そのため、〈言い換え〉用法の「のだ」の主題がわかりにくくなっているときに言い換えの接続詞が前置され、「のだ」という文末の情報からだけでは解釈が難しい〈言い換え〉用法を文頭で明示するものと考えられる。

次に「のだ」文が「が」の文となった例を (10) に挙げる。

- (10) たとえば、こんな二人を考えてみよう。  
一人は、自動車免許を持っている、早大卒の商社マン。  
もう一人は、ムエタイの達人で、歌手活動もしている女子高生。  
あなたは、どちらに価値を感じるだろうか。  
まず、前者のような会社員はどこにでもいる。しかし、後者のような高校生を探そうと思ったら骨が折れるに違いない。つまり、後者の方がより“レアキャラ”なのだ。(教育)

(10) のテキストは、主題 (topic) を「自動車免許を持っている、早大卒の商社マン」と「ムエタイの達人で、歌手活動もしている女子高生」の双方と解釈できるが、テキスト中ではこれらの主題となる名詞句に「は」が後置して、明示的に導入にされておらず、このテキスト部分での主題がわかりにくくなっている。

さらに、(10) では、「のだ」文が前の文脈の「あなたは、どちらに価値を感じるだろうか」という問いの答えとも解釈でき、その場合には「が」を菊地 (1997) の「解答提示<sup>8</sup>」と読むことができ、文末にモダリティ形式を持たない「が」の文の解釈が妥当となる。しかし、言い換えの接続詞が前置することで、書き手 (1 人称) の存在が示唆され、文末にモダリティ形式を持つことが暗示されるため、「が」の文ではなく「は」の文、つまり独立性が高く、前の文を言い換えている文という解釈が可能になると本稿では考える。接続詞は書き手の存在を暗示し、文末にモダリティがあることを示唆し、意味的側面から独立性の高い文であることを示すものと本稿では捉える。このように考えると、「のだ」の主題の存在を暗示する接続詞が「その他」の文で一番多く見られる理由の説明がつかうのではないかと。

<sup>6</sup> 野田 (1997) は、「のだ」の用法を大きく 2 つに分け、述語以外の対象語が否定などの範囲に入るものを「スコープの「の (だ)」」と呼んでいる。

<sup>7</sup> 野田 (1997) は、話し手の心的態度を表すものを「ムードの「のだ」」と呼び、「スコープの「の (だ)」」は「準体助詞の「の」 + 「だ」と組成のままに近いものだが、「ムードの「のだ」」は話し手が事態をどう捉え、聞き手にどう伝えるかという心的態度を表し、「のだ」と一語化したものだという。ただし、野田 (1997 : 34) は、「スコープの「の (だ)」」もガノ可変が成立しないことから助動詞として一語化したものと認めなければならず、一語化はしているが「の」 + 「だ」という組成に近いものとして位置づけるとも述べている。

<sup>8</sup> 菊地 (1997 : 105) は「が」の〈総記〉の用法を〈解答提示〉と呼んでいる。〈解答提示〉は「関心の対象」であればその読みが可能になるという。(10) では前の文脈で「あなたは、どちらに価値を感じるだろうか。」と質問が提示されており、その答えが「のだ」文において「ooが〈プラス評価〉」と解答が提示されていると解釈することが可能だ。

それでは、「は」の文ではどのような条件において接続詞が前置するのか。その例を(11)(12)に挙げる。(11)は「のだ」文に「6番は」と主題(topic)が顕現している。言い換えの始発となる文の主題も同じはずだが、テキスト中には「は」でなく「(僕は)6番打者こそ」と「こそ」で導入されている。そのため、「のだ」文には主題が顕現しているわけだが、言い換えの始発文の主題と「のだ」文の主題が異主題と解釈される恐れがあり、接続詞の前置が見られる。

他方、(12)は言い換えの始点が「日本の企業は」の文で、「のだ」文の主題も同じと考えられるが、「どんなに企業の業績が上がっても給料は」と対比用法の「は」が現われているため、言い換えの文と「のだ」文が同一主題であることがわかりにくくなっており接続詞が前置している。

(11) 僕は6番打者こそ「ポイントゲッター」になれると思っている。なぜなら、クリーンナップは「OPS」の高い選手が並んでいるから(OPSとは、出塁率と長打率の総和で、アメリカでは打者を評価するにあたって重要な指標とされ、スポーツ専門のサイトでは、OPSがボックススコアに記されるほど)、6番に打順が回る時は、ランナーがいる可能性が高い。つまり、6番はかなり高い確率でチャンスが巡ってくる打順なのである。(二軍)

(12) あるいは「給料なんて上げたら会社がつぶれる」「ストなんかするやつは自分勝手なサヨクだ」と言われて、頭から信じている人。アベノミクスで景気がよくなる、幸せになれると思っている人はおそらくそれに近い。

アベノミクス以前、超不景気といわれていた時代でさえ、日本の企業は内部留保を260兆円も貯め込んでいた。それが今350兆円を超えている。つまり、どんなに企業の業績が上がっても給料は上がらないのである。(おめでたい)

このように言い換えの文の主題が「は」で導入されていない場合、または「のだ」文に対比用法の「は」が現われて、言い換えの文と「のだ」文の主題が表層的に同一ではないように見える場合に接続詞の前置が見られた。

本稿の調査では、前の主題が「のだ」文にまで継続し、非顕現となるといった、石原(2021)が〈言い換え〉用法の典型とするテキスト的条件において言い換えの接続詞が前置していたのは68例中2例であった。

#### 4.3 考察のまとめ

「のだ」文を述語に係る主語という観点から「は」の文、「が」の文、「その他」の文と3分類し、それぞれの文で言い換えの接続詞が前置する例を記述し、その前置の条件を考察した。まず、接続詞が前置するのは、「その他」の文が一番多いことが明らかとなった。そして、接続詞の前置は、1つの主題の下でひとまとまりとなったテキストにおいて、「のだ」の「は」に前置する名詞句が言い換えの始まりの文の主題と同一ではない、または、同じ主題となっていることがわかりにくいといったテキスト的条件にあるときに見られた。

#### 5. 結語

言い換えの接続詞は、その前置によって書き手(1人称の主題)の存在が暗示され、「のだ」文がモダリティを持つものであることが示唆される。そのため、独立性が高く、1つの

事態を述べる文、つまり〈言い換え〉用法の「のだ」の解釈が可能、もしくは容易になると本稿では結論づける。

言い換えの接続詞は、あくまで文末の「のだ」で明確に示しきれないテキストの関係性を文頭で補足するものである。

#### 参考文献

- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門第2版』スリーエーネットワーク (2001年を改訂)。  
—— (2018) 『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版。
- 庵功雄・三枝令子 (2013) 『日本語文法演習 まとまりを作る表現：指示詞、接続詞、のだ・わけだ・からだ』スリーエーネットワーク。
- 石原佳弥子 (2021) 「テキストにおける「のだ」の〈言い換え用法〉と〈理由用法〉：「は」と「が」の情報構造の焦点から」『一橋大学国際協力交流センター紀要』3, pp.27-38.
- 奥田靖雄 (1990) 「説明 (その1)：のだ, のである, のです」『ことばの科学 4』, pp.173-216, むぎ書房。
- 菊地康人 (1997) 「「が」の用法の概観」, 川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』, pp.101-123, ひつじ書房。
- 清水まさ子 (2012) 「学术论文でノダ文はどのように用いられているのか」『日本語／日本語教育研究』3, pp.73-89, ココ出版。
- 野田春美 (1967) 『「の (だ)」の機能』くろしお出版。
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店。

#### 用例出典

『「おめでたい人」の思考は現実化する』和田秀樹 (2016) 小学館, 『すべての教育は「洗脳」である』堀江貴文 (2017) 光文社, 『食べもの探訪記』吉本隆明 (2001) 光芒社, 『小さな建築』隈研吾 (2013) 岩波書店, 『テツに学ぶ楽しい鉄道旅入門』野田隆 (2016) ポプラ社, 『二軍監督の仕事』高津臣吾 (2018) 光文社, 『農業新時代』川内イオ (2019) 文藝春秋, 『武士の家計簿』磯田道史 (2003) 新潮社, 『料理は女の義務ですか』阿古真理 (2017) 新潮社, 『和食の知られざる世界』辻芳樹 (2013) 新潮社